［法政大学］

大規模自然災害時の対応拠点を目指して
“CAMP in Campus”

水野 雅男　法政大学現代福祉学部教授

1 なぜ雑魚寝の集団生活を強いるのか

関東大震災から100年が経つが、大規模自然災害発生時の避難所は相も変わらず体育館で雑魚寝スタイル。これに違和感を覚えたのは、我が国と同様火山国で地震の被害に遭っているイタリアの避難所の視察レポートを読んだ時だ。家族ごとにテントで生活している、しかも屋外で。発災から48時間以内にトイレ、シャワー、キッチンカーが手配され、プロボノの調理人が温かい食事を提供するスタイルであり、日常生活の延長でストレス無く避難生活を送っている。非常時だからと我慢を強いる我が国とは全く正反対なことに驚いた。

本学の多摩キャンパスは保全林に囲まれ自然が豊かで広大な敷地を擁する。芝生広場も数カ所点在しており、ここでテントを張ればイタリアスタイルの「人間らしい避難生活」が実現するのではないか、その思いで2019年から“CAMP in Campus”に取り組み始めた。

2 キャンパスでの実証実験

キャンパス内の屋外でテントを張って避難生活を送る対象は、従来の指定避難所の集団生活に馴染まない（弾き出される）家族を想定している。夜泣きしたり走り回ったりする乳幼児を抱える家族、ペットと一緒に生活している家族。

2019年から2022年、全学を対象とした課題解決型フィールドワークという集中講義で、多様な学部学年の学生たちと向き合った。毎年のテーマは「豊かさと包摂性を追求した避難生活のデザイン」「避難生活に豊かさを添える家具等のデザインと制作」「大学キャンパスの資源の再確認と収容力の把握」と変えながら検討を深めていった。

2020年度には「東京都と大学との共同事業」に採

択され「“CAMP in Campus for well-being”～大規模災害時の人間らしい避難生活をキャンパスで～」というテーマで東洋大学、東京工業大学と本学で取り組み、避難所の歴史的な考察、東京都内の地域防災計画の策定内容と課題の整理、海外の避難所の研究などを行った。同時に、乳幼児を抱える家族などを招き、キャンパス内芝生広場にテントを設営し、1泊2日宿泊滞在してもらい、キャンパスの環境性能を評価してもらった。

2021年度以降も宿泊体験の実証実験を継続、途中から2泊3日に期間を延ばし季節ごとに開催している。

当初は研究室単独で取り組んでいたが、2023年度より医学博士の教員と日本防災士会理事に加わってもらった。同時に、法政大学ソーシャル・イノベーションセンター（SIC）のプロジェクトにも位置づけられている。

“CAMP in Campus”は災害時に避難者を受け入れるだけでなく、平時（授業が実施されない休暇期間など）もキャンプ生活を楽しめるようにすることを考えている。そのコンセプトが評価され、2022年にPHASE FREE AWARD 2022「PHASEFREE AWARD Gold（アイデア部門）」を受賞した。

3 ボランティアキャンプを併設

令和6年能登半島地震で奥能登地域は甚大な被害を受けた。筆者は発災2週間後に現地に入り、ボランティアの姿が見えないことに危機感を覚え、珠洲市に「ボランティアキャンプすず（ボラキャンすず）」を開設し、運営に当たっている。市有地のオートキャンプ場にテントを約50張り設営し、全国から駆けつけるボランティアに滞在拠点を提供している。

この経験から、“CAMP in Campus”は、被災者の避難生活を支える拠点としてだけでなく、ボランティアの滞在拠点としても期待されていることを痛感している。大学キャンパスは災害発生時に、空間や設備を開放すると同時にそのマネジメントを担う学生も提供できるように教育プログラムを検討する必要があるだろう。

牧歌的な雰囲気が漂う
“CAMP in Campus”の光景

［関西学院大学］

日常の中の非日常―大学構内でキャンプ―

石割 淳　関西学院大学神戸三田キャンパス事務室次長

はじめに

関西学院大学神戸三田キャンパス（以下「KSC」という）は、郊外に立地する自然豊かなキャンパスで、2025年で30周年を迎える。このKSCで展開する特徴的なプログラムの一つに「Camping Campus®」がある。

1 新しい学びの場の創造

2020年6月㈱スノーピークと包括連携協定を締結した。この協定による大きな取り組みの一つが、キャンプの要素を取り入れた新しい学びの場「Camping Campus®」の創造である。「Camping Campus®」とは、学部や学生の壁、大学と社会の壁、人間社会と自然の壁、教室という場所的制約、授業時間や建物の開館時間という時間的制約など、ありとあらゆる障壁をボーダレス化し、新しい学びの時間と空間を提供しようという試みである。キャンパスという日常空間に、キャンプのテントやたき火といった非日常のアイテムを融合させる。それにより、ワクワク・ドキドキ感や知的好奇心、想像力を掻き立て、自由な発想でイノベーションを起こせる人材の育成を目指している。日常に非日常を取り入れることで、ボーダレスな空間を演出。多様な人々が集まり、教室では得られない人間関係が生まれることが期待できる。キャンパス

Camping Campus® プログラムの様子

内にこうした仕掛けを取り入れ、学生生活の当たり前の風景にすることは、これまでとは質的に異なる新しい意識を学生の心にもたらしてくれる。

また、この「Camping Campus®」の取り組みを推進・運営するKSCの学生有志約40名が所属するグループ「CAMP×US®（キャンプ・アス）」の存在も特徴的だ。魅力あふれるキャンパスライフを送るため、自分たちの学ぶキャンパスの明日（あす）を創造する活動をしている。

2 Camping Campus®プログラムの展開

協定締結後、プログラムを本格化しようとした2020年春学期、コロナ禍により学生たちはキャンパスに登校できない状況が続いた。秋学期になり一部で対面授業の実施を始めたが規模は小さく、特に新入生たちは入学後、友達をつくれないという悩みを抱えていた。そこで同年12月に「たき火Talk@KSC」という、数時間だがたき火を囲んで自由に懇談する場を設けた。3日間開催したところ参加者の半数は1年生で、初対面同士たき火を囲んでの交流を通し「非日常の経験と先輩との交流は新鮮で友達もできた」との声が多く聞かれた。

2021年度以降もコロナ禍の影響で、日帰りプログラム「1dayキャンプ@KSC」を展開してきた。初めて経験するテント設営や昼食づくり、テント内でのグループディスカッション・発表、たき火など、参加した学生たちは授業とは異なる時間をともに過ごし、学部学年を超えた交流の中からさまざまな価値観の共有の大切さを学んでいた。

2023年度にはキャリアをテーマにした初の宿泊を伴うプログラムを展開し、今年度も秋に「CAMP×US®」が提案・企画するプログラムを実施した。これから「Camping Campus®」の創造が本格化し、既成概念に囚われないボーダレスな学びが深化していくところである。

テントでのグループディスカッション

［慶應義塾大学］

多世代共創型 X-ship Camp
―サバイバルキャンプによる先導者育成プログラム―

神武 直彦教授　慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
倉田知幸教諭・クリスチャンソンM教諭・納谷洋平主任　慶應義塾横浜初等部

1 プログラム開設の経緯とその目的

慶應義塾の特徴のひとつは、小学校から大学院に至るまで一貫教育の仕組みがあり、時代の先導者を育成することを目的としていることである。小学校5年生以上の各世代の児童・生徒や学生が集い、3日間のキャンプを行うことで、Friendship や Leadership、Followership、Ownership といった先導者に必要な能力（X-ship）の育成を目的としたX-ship Campプログラムを毎年夏休み期間中に実施している。なお、それぞれの世代の目的は以下のように設定した。

小学生：他人に依存せず、自立し、他者と協力しながら主体的に行動し、プログラムの中で、先導者の役割について語り合い、自分の未来像についても考えることができること。

中高生：小学生と共に考え、行動し、学びながら支援をし、必要に応じて大学生・大学院生と対話を重ね、俯瞰的かつ緻密な視野を獲得できること。

大学・大学院生：小中高生がX-shipについて自ら考え、行動する機会を様々な状況で得られるよう意識したファシリテーション能力を獲得できること。

2 プログラム実施内容とその効果

世代を超えての対話や共創の促進を重視し、2024年度は小学生4名、中高生2名、大学生・大学院生2名で構成される「ハウス」と称するグループで参加者が取り組みを行うことを原則とした。事前ワークショップを慶應義塾横浜初等部にて実施し、参加者が一堂に会して自己紹介を行うとともに、4つのハウスに分かれ、事前知識の獲得やチーミングを目的としたテント設営、グループの目標設定やそれに向けたアクションに関するワークショップを実施した。3週間後のキャンプ初日は、テント設置、火おこしなどのキャンプサイト設営を行い、夕

食を作り、全員で喫食した。その後、大学院留学生による英語での星空観察会を実施し、夏の星座を鑑賞した。最後に全員で焚き火を囲んで1日を振り返る対話を行った。2日目は大学院生による「マシュマロチャレンジ」や、大学生による「モールス信号」企画を行った。その後、2日間ハウスごとに練習してきた「X-ship」に関する寸劇を披露し、その理解を深めた。3日目はテントをはじめとする全ての片づけとキャンプ前よりも綺麗にすることを心がけるキャンプサイトの清掃を行い帰路についた。なお、その日のうちに慶應義塾横浜初等部にて振り返り学習を実施した。そして、その3日後には大学院において、参加者による振り返りのためのワークショップを実施し、約1カ月間におよぶ取り組みでの個人やハウスごとの心の変化や成長、課題などを共有し、全行程を終了した。

慶應義塾は小学校から大学院までの一貫教育を特徴とした学塾であるが、全ての世代が一堂に会し、共に考え、行動する機会は限定的である。その中で、X-ship Campプログラムは多世代共創による学びを得るひとつの取り組みとして価値があることをアンケートや行動観察の結果から確認している。例えば、小中高生にとっては、ロールモデルとなる大学・大学院生との交流から自分の将来像をより具体化できる、大学・大学院生にとってはファシリテーションなどを通じて、X-shipについての理解を深める機会であったことを確認した。

3 今後の展望

本プログラムでは、各フェーズで動画撮影やアンケート、インタビューの実施によるデータ取得を行った。その分析によって、プログラムの有効性や課題を検証し、学術論文などにまとめ、国内外の活動に展開していくことも検討している。

X-ship Campにて